

華麗なるハプスブルク帝国——その永遠の光芒（五）
フランツ一世と喪服の「女帝」

富山典彦

一七六二年のフーベルトゥスベルクの和平条約によって七年戦争は終わり、マリア・テレジアがあればどこで終わったシレジアは失ったものの、長男ヨーゼフをローマ・ドイツ王ヨーゼフ二世として戴冠させることに成功し、ハプスブルク・ロートリンゲン家はふたたび神聖ローマ皇帝位の事実上の世襲を取り戻した。しかし、オーストリア継承戦争勃発時点ではまだ弱小国だったプロイセン王国を加えたヨーロッパの列強は、新たな勢力図へと大きく動き始めていた。

そのプロイセンはロシア帝国との結び付きを強めるが、それはまた、南のバルカン半島に勢力を伸ばそうとするロシアの意図の表れでもあった。これに対してハプスブルク家のオーストリアは、このロシアの動きを牽制しようとする。かつてオスマン・トルコが、バルカン半島はもちろんのことハンガリーまでもその支配下に置いていた時代は、もう昔のこととなったのである。ハプスブルク家は、宿敵であったフランス王国のブルボン家と縁組みをする、という方向に足を踏み出すことになる。

このような情勢のなかで、ザクセン選帝侯でもあるポーランド王アウグストゥス三世が、一七六三年十月五日に死去する。ポーランド継承戦争を経て、なんとか父親の後を継いでポーランド王になれたのだが、ポーランドという王国はまさにそういうところであり、今回は翌年の九月七日にロシアの女帝エカテリーナ二世に支援されたアウグスト・ポニアトスキがポーランド王スタニスラウス二世として選ばれ、一応の決着をみる。しかし、このポーランド王はポーランドの議会に見放されてしまい、その結果、ロシアとプロイセンはポーランドを分割することで意見の一致をみる。三度にわたって行われたポーランド分割は、ここから始まる。

この三度のポーランド分割のうち二度、ハプスブルク家も「参加」することになるが、それは、フランツ一世の突然の死のあと、マリアⅡテレジアと共同統治者になった長男ヨーゼフ二世の政策であり、マリアⅡテレジアはこの分割に反対だった。だから三度のうち二度、ということなのだろうが、これまでほとんどヨーロッパの歴史に登場してこなかったロシアを加えて、ヨーロッパの政治情勢が風雲急を告げていたことを、この事態は如実に示している。プリンツ・オイゲンが活躍していた頃は、ハプスブルク帝国と友好関係にあった大英帝国も、今はプロイセン王国に接近していた。

ハプスブルク帝国が取るべき道は、かつて一七四九年にカウニッツ伯爵が提案した、フランスのブルボン家との同盟しかない。ハプスブルク家は、妻を亡くしたルイ十五世の後妻をはじめとして、ブルボン家の分家はもちろん、最終的には本家の王太子ルイ、のちのフランス王ルイ十六世にまで婚姻政策を發展させる。

もともと計画倒れになったこともあるが、具体的に挙げていくと、まずはマリアⅡテレジアの娘のなかでもっとも美しいと評判のマリアⅡエリーザベト（一七四三〜一八〇八）は、ルイ十五世の後妻にする予定だったが、天然痘を発症したため、その自慢の美貌が失われ、生涯を修道女として生きることになってしまった。

そのすぐ下の娘マリアⅡアマリーエ（一七四六〜一八〇四）は、バルマ・ピアツェンツァ・ガスタラ公フェルナント二世と結婚する。彼の母はルイ十五世の娘だから、母方の祖父がルイ十五世ということになる。もしもマリアⅡエリーザベトの結婚が実現していたなら、すぐ上の姉が義理の祖母ということになっ

ていたのである。

そのあとに、成人しなかった娘が三人続くが、その三人の一番下だったマリア・ヨゼファ（一七五一—一七六七）は、なんと、結婚相手が決まっただけで、その結婚の直前に、当時流行していた天然痘で死んでしまったのである。その相手とは、ブルボン家のシチリア王フェルナント三世で、やはりブルボン家絡みの結婚であった。

マリア・ヨゼファにはちょうど一つ年下の妹マリア・カロリーネ（一七五二—一八一四）がいたから、これ幸いと、こちらがシチリア王の王妃マリア・カロリーネになる。もつとも彼女は、幼い頃マリー・シャルロットとフランス語で呼ばれていたということだから、その意味するところはあまりにも明白、つまり、ブルボン家本家の王太子ルイの結婚相手が、まさに彼女だったのである。マリア・ヨゼファが結婚を目前に控えて死んでしまったため、予定されていた結婚相手が一つずつずれたのである。マリア・カロリーネの妹は、言わずと知れたマリア・アントーニア（一七五五—一七九三）、のちのフランス王ルイ十六世の王妃マリー・アントワネットである。

歴史に「もしもあの時……」という仮定は成立しないが、革命広場で断頭台の露と消えたフランス王妃は、マリー・アントワネットではなくマリー・シャルロットだったのだ。しかし、シチリア王妃としてその政治的才覚を存分に発揮した彼女がフランス王妃となっていたら、もしかしたらフランス革命は起こらなかったかもしれないし、起こっていても別の形でその革命が進行したかもしれない。とはいえ、歴史は避けられない事実の複雑怪奇な連鎖である。もつとも、複雑な連鎖であるが故に、どのように読み

解いていくのか、それについてはいささかわれわれに自由が与えられていると思うし、だからこそ筆者は、オーストリア文学者としてハプスブルク家のこの「歴史」に、蠅螂の斧を振るつていてという次第である。

さて、話を戻すことにしよう。ハプスブルク家とブルボン家との結びつきは、今挙げた例だけではない。ハプスブルク帝国の後継者は長男のヨーゼフ二世（一七四一—一七九〇）と決まっていたが、三男レオポルト、後の皇帝レオポルト二世（一七四七—一七九二）も、この政略結婚の例外ではなかった。母のマリア・ア・テレジア以来、ハプスブルク家の家領を長子が単独で相続することが正式に決まり、ようやくハプスブルク帝国という通称が実体化していたこの時代、故郷ロートリンゲン、フランス語で言うところレーヌを捨ててマリア・ア・テレジアと結婚したフランツ・シシュテファンは、その代わりにかつてメデイチ家が支配していたトスカナ大公国を手に入れていた。これは、ハプスブルク家の家領の集合体とは別になっていたから、これを三男のレオポルトが相続することになっていた。

このトスカナ大公レオポルト一世の結婚相手としては、やはりブルボン家関係のプリンセスということになる。その相手とはこの場合、スペイン王女マリア・イルトヴィカで、スペイン系ハプスブルク家の血が絶えたとき、レオポルトの祖父のカール六世が、一時的にスペイン王を名乗ったこともあったが、今はブルボン家がスペイン王の王冠を手をしている。一七四五年生まれのこのプリンセスは、レオポルトよりも少し年上ということになるが、これによってハプスブルク家とブルボン家との結合は、さらに確かなものとなる。

この二人の結婚式は、一七六五年八月五日にインスブルックで行われた。チロルの首都インスブルック

は、かつてマクシミリアン一世が宮廷を置き、あの有名な金の小屋根のある小都市である。このアルプス山中の都市で行われた結婚後、アルプスを越えてトスカナに居を定めるこの二人にとって、絶好の婚礼の場であった。

しかし、三千メートル級の高山に挟まれたこの美しい都市は、ただ美しいばかりではなく、高山に挟まれた盆地特有の気候にも「恵まれて」いた。すなわち、晴れた昼間は相当程度の気温にまで上昇する。花婿の父親であるフランツ一世はこのとき五十六歳、ウィーンからの長旅と、結婚式の祝宴と、そして盆地独特の気候、それにまた、政治的には無能と言われつつも、変わりつつある時代の波に翻弄されていたであろう神経……あれやこれやで、この幸せな家族旅行の最中の八月十八日に、フランツ一世は突然死んでしまう。

死というものは、もしかしたら「偶然に死に神と出会うこと」であって、ウィーンを旅立つときには、誰もこのような事態を予期していなかったことだろう。六歳の出会い以来、ずっとこの人一筋だったマリア・テレジアの心情は計り知ることができない。ただ、彼女はまだ一人前になっていない多くの子どもたちの母親でもあった。一番下の息子マクシミリアン・フランツはまだ六歳で、あのマリー・アントワネットもこの幼子の一つ年上であるにすぎなかった。父の死の二年後に自らも死ぬ運命だったマリア・ヨゼファに、最愛の夫を亡くした母マリア・テレジアは、こんな手紙を書いている。

「私はひどく打ちのめされています。宗教とあなたたち私のいとしい子どもたちだけが、私の人生を

なんとか耐えていけるようになっていきます。私はこの人生に魂の安らぎを捧げるつもりです。どうか私たちの良き大切な神様に祈ってください。あなた方に私は祝福を授けます、そしてあなた方の良き母親でいます。」(Pelham, Helga: Maira Theresia ganz privat. Wien 2003, S.179.)

マリア＝テレジアは、夫の死んだ部屋を礼拝堂にし、夫の髪の毛を腕輪にした。そして、死ぬまで黒い喪服を着て過ごした。マリア＝テレジアのお気に入りのお嬢マリー＝クリステイーネ(一七四二―一七九八)は、夫であるザクセン＝テツシエン侯アルベルト二世と旅をして、趣味の芸術品などをウィーンに持ち帰ったが、この夫妻と母と数人の兄弟姉妹が、その芸術品を一緒に見ている絵が残っている。この絵に描かれたマリア＝テレジアは、家族に囲まれて幸せそうな顔もしているが、たしかに喪服に身を包んでいる。

夫の死の三ヶ月後に、「太陽までが私には暗く輝いている」と言い、一人きりで部屋にこもって「誰か」と話していた、という一種の都市伝説も残されている。それほど夫の死が「女帝」の心身を衰弱させていたのである。プロイセンとの戦争に明け暮れていたとはいえ、子宝に恵まれた初恋の人との結婚生活は、二十九年六ヶ月と六日だった。それを彼女はさらに、「月で数えると三三五ヶ月、週にすると一五四〇週、日数にすると一〇七八一日、時間にすると三五八七四時間」と計算し直している。時間にすると、夫と生きた期間に妙なりアリティが生まれてくるから不思議だ。分にすればもっとすごいことになるが、秒刻みのスケジュールに追い回される現代社会とは違って、分単位、まして秒単位にする必要はなかったのだろう。

仲の良い夫婦は、夫や妻に先立たれたとき、その後を追っていくと言われていたが、これほど夫一筋だったマリア・テレジアは、なんと夫の死後十五年間も生き続ける。結婚生活のほぼ半分の未亡人生活である。母親としてまだ幼い子どもたちを育てるとともに、「女帝」としては、長男のヨーゼフ二世を共同統治者として、複雑怪奇な外交問題と、民族や言語や宗教や歴史や慣習や、法律までもが統一されていないモザイク国家の内政改革を続けなくてはならない。そのうえ、しばしば状況判断を欠いたヨーゼフ二世の行き過ぎに、ブレーキをかける役目も果たさなくてはならない。

このことについては、いずれまた稿を改めて述べたいと思うが、仲のよい夫婦にしては、マリア・テレジアの未亡人の期間が長すぎるのは、少し気になるところだ。ある意味で、マリア・テレジアの情熱に押されて結婚したフランツ・シュテファンは、どの程度この妻を愛していたのだろうか。ハプスブルク家の男性の特徴として挙げられることの一つに、妻一筋の愛情を示すことがある。それは、カトリック世界の守護者としての神聖ローマ皇帝を、事実上世襲化してきたハプスブルク家にとって、基本中の基本と云っていいだろう。

マリア・テレジアの祖父レオポルト一世（一六四〇～一七〇五）は三度結婚しているが、それは、妻たちが次々と先立ってしまったからであり、性格の不一致による離婚を繰り返したわけではない。マリア・テレジアの父カール六世も、どちらかというとき弱な妻を生涯愛し続けたことは確かだ。もともと、妻が自分より先に死んだ場合には再婚して、今度こそ男児の誕生を期したのであるが。

ただし、どんな場合にも例外はあるもので、カール六世の兄ヨーゼフ一世は、いよいよ華やかになって

いくバロックの宮廷にあって、たとえて言えば梨園の男だった。早く結婚したのも、このままではどうなるかわからないと心配した周囲の人たちが、ともかく一人しかるべき女性をそばに置いておこうと配慮したからだと言われている。

どちらのタイプが男性として自然なのはとりあえず議論しないことにして、ロートリンゲン家出身のフランツ一世はどうだったろうか。同じロートリンゲン家に、フランツ一世の弟カール公がいたが、デビュー戦で敗北を喫し戦士としての無能をさらけ出してしまった兄とは違って、いくつかの戦いで戦功を挙げ、マリア・テレジアの妹マリア・アンナとめでたく結婚している。

この夫婦は、ハプスブルク帝国の飛び地ネーデルラントの総督に任命されるが、マリア・アンナは間もなくブリュッセルで死亡している。ふつうなら、二番目の妻と結婚することになるのだが、カール公はその後生涯独り身を貫く。これがただだんに、亡くなった妻へのひたむきな愛の故、と理解していいかどうかはわからないが、妻の存命中から浮気を繰り返し、妻が死んだあとすぐにその相手と結婚するという例がいくつもあることを考えると、カール公の妻に対する誠実さは、間違いないだろう。

ちなみに、近いところでは、マリア・テレジアのお気に入りの娘であるマリー・クリスティーヌは、その死後、夫のザクセン・テッシェン侯アルベルト二世が、ウィーンのアウグスティーナ教会に妻の記念碑を作らせたから、ハプスブルク家ではないアルベルト二世も、ハプスブルク家の男性の特徴を具えている。

さて、肝心なのは、六歳の初恋を生涯貫き等した「女帝」マリア・テレジアとその夫フランツ一世との夫婦関係である。マリア・テレジアの妹や娘たちの例から考えると、夫婦仲が悪いため子どもが生まれな

かったわけではなく、夫婦仲がよかったから子どもを沢山産んだということでもないようで、この身近な例だけから推測すると、むしろその逆のようだ。妻がいつも妊娠しているため、ついつい宮廷の美女たちとの逢瀬でその寂しさを紛らわせてしまう、ということかもしれない。

フランツ一世は、どうやらこちらのパターンだったらしくて、いろいろ浮いた噂もあったようだ。マリ
ア・テレジアは、フランツ一世の死後、その「不倫相手」とされるアウアースベルク伯爵夫人と二人きりになったとき、「私たちは二人とも大事な人を失って苦しんでいますね」と話したそうで、「女帝」マリア・テレジアは最愛の人を亡くした心の苦しみを、その「不倫相手」とさえ共有できるほど大きな人物だったと言えるのかもしれない。そうでなければ、広大なハプスブルク帝国を維持し、内政改革によりさらに発展させることなどできなかっただろう。

フランツ一世は、六歳のマリア・テレジアが熱狂するほどの美少年だったということだから、バロック時代からロココ時代に移ろうとしているハプスブルク家の宮廷で、さぞかし美女たちの熱い眼差しを集めたことだろう。しかしそれもまた、宮廷社会を維持していくために必要なことだった、などと同じ男性である筆者が言うべきことではないかもしれないが、ただし、たとえ「不倫相手」とされる女性がいたとしても、フランツ一世は「女帝」の夫として、それなりのことは成し遂げていることも確かだ。

ロートリンゲン公フランツ三世・シユテファンが生まれたのは、一七〇八年十二月八日だが、この日は、聖母マリアの無原罪受胎の祝日にあたっている。この祝日はかなり古くから信仰されていたのだが、カトリックの教義として正式に認められるためには十九世紀を待たねばならない。とはいえ、この当時、マリア

ツエルをはじめとして、聖母マリアの巡礼教会がハプスブルク帝国のあちこちにあったことを考えると、偶然とはいえ、運命の誕生日である。

そして、十五歳のときにハプスブルク家の宮廷に来て、六歳のマリア＝テレジアの憧れの人となるのだが、その当時 *schöner Franzos* と呼ばれていたという。たしかにこの当時の肖像画を見ると、美少女マリア＝テレジアに負けず劣らず美男子である。もちろん、この美男美女のカップルが現実の夫婦となるまでには、いくつかの障害を乗り越えなくてはならないのではあるが。

一七二九年には父が死んだために、彼はロートリンゲンに戻るのだが、結局、オルレアン公女であった母にロートリンゲン、いやロレーヌ公国の支配を任せ、一七三一年から三二年にかけて、ヨーロッパ大旅行をしながらウィーンに戻ってくる。まずネーデルラントでは、デン・ハーグでフリーメーソンのロージェに迎え入れられる。そののちフランツ一世は、ウィーンのフリーメーソンの創始者となる。

海を渡ってロンドンでは、国王ジョージ二世に心からの歓迎を受けている。いずれ大英帝国とは陰悪な関係になるとしても、この時点ではまだ、フランス王国とハプスブルク帝国との対立関係において、大英帝国は有力な味方であった。

ふたたび大陸に戻り、ベルリンではフリードリヒ皇太子と「固い友情」を結ぶ。この皇太子こそ、のちにプロイセン王フリードリヒ二世となり、「女帝」マリア＝テレジアと最後まで争うことになる「大王」である。この争いの焦点になったのは、ハプスブルク家の家領であったシレジアの領有で、最終的にはシレジアの大部分はプロイセンに奪われてしまう。もちろんこの時点では、誰もそんな未来は予見していなかつ

たことだろう。

そのシレジアの中心都市ブレスラウでは、フランツⅡシユテファンはマインツ選帝侯と会っている。マインツ選帝侯、ケルン選帝侯、トリアー選帝侯の三人はすべて大司教であり、七人の選帝侯のうちの聖職者選帝侯である。これは将来、フランツⅡシユテファンがハプスブルク家のマリアⅡテレジアと結婚したあと、ハプスブルク家が独占してきた神聖ローマ皇帝位を確保するための画策であることは見えている。

残る四人の選帝侯は、ボヘミア王、ブランデンブルク辺境伯、ザクセン公、プファルツ宮中伯で、そのうちボヘミア王はハプスブルク家が手中にしている。プロイセン王は同時にまたブランデンブルク辺境伯でもあり、フランツⅡシユテファンのこの大旅行の意味は、容易に理解できる。それがヨーロッパの外交、ということなのだろう。

ハプスブルク家の宮廷に戻ってきたフランツⅡシユテファンは、一七三二年にハンガリー総督に任命されている。ハンガリーというとブダペストを思い浮かべるが、この当時ハンガリーの宮廷はブレスブルク、現在はスロバキア共和国の首都ブラティスラヴァにあった。ウィーンからドナウ川を船で下ること一時間ほどのこの都市で、フランツ・シユテファンは結婚が実現するまでのあいだ暮らして、ウィーンのマリアⅡテレジアと文通をするのである。

このときの経験が影響したのか、マリアⅡテレジアは多くの手紙を書き残している。末娘のフランシス王妃マリーⅡアントワネットに書き送った「秘密の手紙」は、日本語にも翻訳されている（パウル・クリストフ編・藤川芳朗訳『マリー・アントワネットとマリア・テレジア 秘密の往復書簡』岩波書店、二〇〇二

年)が、シチリア王と結婚したマリア・カロリーナにも、同様の手紙を多数書き送っている。結婚はただ、愛する二人のためにあるのではない。

故郷ロートリンゲン公国とトスカナ大公国との交換を条件に、マリア・テレジアと暗れて結婚が認められる。またこのときの枢密会議では、マリア・テレジアの妹マリア・アンナとフランツ・シユテファンの弟カールとの結婚も決定されている。ロートリンゲンを失ったこの二人の兄弟は、もうハプスブルク家なしには生きていけない。

フランツ・シユテファンは政治的にも軍事的にも「無能」で知られているが、その義父になる予定のカール六世も、少なくとも軍事的には能力があったとは言えず、かつてプリンツ・オイゲンの活躍によりトルコからベオグラードを取り戻したというのに、よせばいいのにまたトルコとの戦争を仕掛ける。その狙いは、ロートリンゲン家の二人の兄弟を、この戦争で華々しくデビューさせようということだったが、これは見事に失敗。せっかく手にしていた領地の一部も取り返されてしまう。もう「騎士の時代」は過去のもの、それに、衰えたとはいえ、まだまだトルコ帝国の崩壊はずっと先のことで、奇しくも、ハプスブルク帝国の崩壊と同じ一九一八年を待たなくてはならない。

フランツ・シユテファンとマリア・テレジア夫妻は、一七三七年以来トスカナ大公夫妻となっていたが、このトルコ戦での失敗のあと、一七三八年から三九年にかけて、トスカナに三か月間滞在した。のちに、この夫婦の三男レオポルトがトスカナ大公としてこの地に留まり、見事にこの破綻した大公国の内政改革を実現するが、この夫婦はその後も二度と、トスカナの地に足を踏み入れることがなかった。

この二人にとっては、どうしても馴染むことのできない異国の地であつただろうが、それよりもっと大変だつたのは、一七四〇年十月二十日に、五十五歳の若さでマリアⅡテレジアの父カール六世が死去したことである。このとき、マリアⅡテレジアは四人目の子どもを身ごもっていたが、それがのちの皇帝ヨーゼフ二世で、惜しくも希望のプリンスの誕生は、いかなる運命の皮肉か、ハプスブルク家最後の皇帝カール六世の死に間に合わなかつたのである。

これから先は、戦争に次ぐ戦争、その合間に、マリアⅡテレジアは次々と子どもを産み続ける。「女帝」として「母親」として、休む暇などなかつたことだろう。その間、一応共同統治者として認められることになつたフランツⅡシユテファン、皇帝になつてフランツ一世は、何をしていただろうか。もちろん、華やかなロココの宮廷で、その美男子ぶりを發揮したわけだが、もちろんそういう浮ついたことばかりではない。

あのモーツァルトが入つていたことで知られる秘密結社フリーメーソンをウィーンにもたらししたのは、カール六世である。秘密結社だから、何か得体の知れない陰謀を企てていた、とも考えられるが、ゲートをはじめとする文化人の多くがフリーメーソンのロージエに入つていたことが知られているし、よく言えば、政治家や文化人などの社交界でもあつた、という側面も見える。

マリアⅡテレジアの手が届かない部分で、夫のフランツ一世はこの秘密結社を通じて、秘密の社交界の「帝王」として君臨していたのではないだろうか。秘密の世界のことだから、「君臨」というのは言葉が違つているかもしれないが、政治・外交・戦争という表の世界は妻である「女帝」に任せて、裏の世界で広く

深い人脈をもっていた、という証拠はもちろん見つからないとしても、それほど不当な想像でもあるまい。子どものときから、政治よりも学問が好きで、その学問を支えるために「お金」が好きだったという。この時代の学問の特徴を一言で表すとすれば、それは、世界各地の珍品奇品を集めることで、そのためにはもちろん、莫大な費用がかかる。マリア・テレジアがハプスブルク家の家領を相続したとき、財政はすでに破綻していたし、オーストリア継承戦争や七年戦争などで、財政はさらに悪化したのだが、フランツ一世は、ロートリンゲンから財政顧問を呼び寄せて、財政の立て直しに貢献する。なんと、妻の財産までも管理下に置いたというから、たとえ浮気な男であったとしても、その点は信頼以上のものがあつたと思われる。

一七四〇年にカール六世が死に、その翌年、ヴェッテルスバッハ家の皇帝カール七世が即位するに及んで、「ハプスブルク家は終わりだ」というフランス宮廷のさる枢機卿の「予言」が実現するかと思いきや、バイエルンとの戦争ではその本拠地ミュンヘンを占領するほどの勢いであつた。一七四四年に、底を突いてしまっていたハプスブルク家の金庫に、なんとフランツ・シユテファンは百万グルデンを抛出したということがある。

その甲斐あつてか、カール七世が死んだあと、一七四五年九月十三日にフランツ・シユテファンは神聖ローマ皇帝に選ばれ、十月四日に選ばれたのと同じ場所フランクフルト・アム・マインで戴冠し、皇帝フランツ一世となる。すでにハプスブルク家の家領であるハンガリー王国の王、ボヘミア王国の女王になつていたマリア・テレジアは、このとき神聖ローマ皇帝妃となつた。皇帝妃をドイツ語で言うとき *Kaiserin* で

ある。皇帝 *Emperor* の女性形だから女性皇帝、つまり「女帝」というふうにも文法的には理解できるが、もちろん、女性の皇帝を認めていない神聖ローマ帝国のことだから、正しくは「皇帝妃」である。

このときにも少々、夫婦間でもめ事が生じたようだ。皇帝妃とはいえ、その夫フランツ一世はあくまでもハプスブルク家の家領の共同統治者なのだから、実質的にはマリア・テレジアが「女帝」であり、夫は妻に、戴冠式を一緒にしようとする。妻はそれに対して、戴冠式に出ることを拒否したのである。カール七世の妻であったマリア・アマリアはマリア・テレジアの従姉だが、こちらは、「皇帝妃」として戴冠式に出席した絵が残っているから、帝国の「規則」により「女帝」にはなれないとしても、「皇帝妃」としての戴冠式はあったのだろう。

もっとも、マリア・テレジアの場合は、翌年二月の出産を控えてお腹がかなり大きく膨らんでいたという事情もあっただろうが、やはりその実力からいって「女帝」になってしまったのかもしれない。ただし、念願の夫の皇帝戴冠式のために、フランクフルトへの旅行には同伴した。この旅行が、マリア・テレジアにとって最後の「外国」旅行だった。

カール六世の喪も明けやらぬときに、プロイセンがシレジアに侵入したとき、フランツ・シユテファンは妻に、シレジアは諦めようと提言したのだが、これはもちろん拒否されて、「大王」対「女帝」の長すぎる戦いが繰り広げられることになる。シレジアは資源が豊富で、マニユファクチャーもあって、ハプスブルク帝国にとって欠かすことのできない「財源」であったことは確かだが、もちろんマリア・テレジアにはそういう「計算」よりもむしろ、父親から相続した家領をすべてそのまま維持したい、維持して息子に

渡したいという、娘として母親としての執念があつたのだろう。時としてこの種の執念は、コストパフォーマンス感覚を狂わせる。

夫は、現在ウィーン空港のあるシュヴェヒャートとサツシンに木綿工場を造らせ、一七五九年にはそこで三万人もの労働者を働かせている。フリードリヒ大王との戦争で費やした人的・物的資源に比べたら、得たものは無に等しいのだから、その分、別のところで産業振興策を展開するに越したことはないのだ。晩年には平和主義者になるマリア・テレジアも、このときにはまだ、戦争という「怪物」の怖さを知らなかったということだろうか。

現在のウィーン十三区にあるシェーンブルン宮殿は、マリア・テレジアが好んだと言われている独特の黄色、マリア・テレジアン・イエローに塗られ、マティアス皇帝（一五七〇—一六一九）のときの狩猟館とは比較にならない壮大な宮殿に建て替えられている。この宮殿の一角に、ヨーロッパで最古の動物園があり、今はパンダが人気を集めているが、これはもともと、フランツ一世に由来するものである。

自然科学と言ったとき、それはいったいどういうものを指すのだろうか。天球の無数の星から、地上の動物植物や海中の魚類、空を飛ぶ鳥類や昆虫類、地中深くに秘められた鉱石や宝石、さらには、ヨーロッパの外の「新世界」にあるまったく別の存在たち。それらを動かす根本原理を知るために、とにかくありとあらゆる存在を集め回る。集めたうえで、どう理解するかだ。

またまたロートリンゲンから植物学者と庭園師を呼んで、フランツ一世はシェーンブルン宮殿の一角に、植物園を造らせた。熱帯から運んできた植物を育てるためには、大きなガラス張りのドームが必要で、今

もそれは偉容を誇っている。そして、ヨーロッパでは目にするのできない動物たちだ。当時何がいたのかについては、まだ調査していないが、おそらくゾウやサイやキリンなどが、熱帯から運ばれてきたことだろう。

この動物園の中央に小さなパビリオンが建っている。今は食堂として営業しているが、当時もごく限定された「客」のための食べ物付きの休憩所だった。実は、その地下室の床に、奇妙な五芒星のマークが施されている。自然科学者のもう一つの面、世界の秘密を探ろうとする熱意は、ここに化学実験室を作らせたようだ。化学実験というものは、つまり錬金術のことであり、フランツ一世はこの場所と、シェーンブルン宮殿の近くの秘密の場所に、錬金術の作業場をこしらえていた。

ドイツ文学者でもあった随筆家内田百閒はよく「錬金術」という言葉を使っていたが、これは、書いた原稿の原稿料をもらうのではなく、これから書くはずの原稿を担保にして出版社からお金を引き出すことだったが、フランツ一世も、その種の「錬金術」が得意だったことは間違いない、それがひいては、マリア・テレジアにも、ハプスブルク帝国にも必要だったことは言うまでもない。

十九世紀末に完成するリンクシュトラッセの一角に、マリア・テレジアの銅像が建っている。天に向かって腕を拡げているその姿はまさに「女帝」である。天に向かって聳え立つマリア・テレジアの下には、この「女帝」を支える数人の騎馬像が立っている。その両脇に、同じような建物が二つ建っているが、一つは美術史博物館で、もう一つは自然史博物館である。ハプスブルク家が集めた絵画・彫刻などは前者、動植物の標本や鉱物などは後者に展示されている。言うまでもなく、フランツ一世の集めたものが、この自

然史博物館の展示物の核をなしている。フランツ一世の「鍊金術」の賜物である。

また、六百万グルデンの「家族基金」もフランツ一世の贈り物で、これはなんと一九一九年まで続いたというから、つい「女帝」の陰に隠れてその姿を見失いがちな皇帝フランツ一世なしには、ハプスブルク帝国も、そして「女帝」マリア・テレジアもあり得なかったことは間違いない。たとえ浮気をされようとも、マリア・テレジアにとっては、その愛を生涯にわたって捧げるに値する夫であったのは、紛れもない事実である。

フランツ一世の突然の死によって、ハプスブルク・ロートリンゲン家の長男ヨーゼフ二世と、三男レオポルト二世が相次いでこの帝国を支えていくことになるが、ようやく訪れたフランスのブルボン家との蜜月も、革命によって無残にも吹き飛ばされてしまう。十五年間も未亡人として生きなくてはならなかったマリア・テレジアだが、一七八〇年十一月二十九日に死んだことで、この嵐を知らないですんだことは、せめてもの神の恩寵だったかもしれない。

カプチン派教会の皇帝廟に、マリア・テレジアはフランツ一世と同じ棺に入って鎮座している。死んだ後も、ずっと一緒にいたい、という「女帝」の遺志なのだろう。